

おぼえよう

短歌… 五・七・五・七・七の三十一音。五・七・五が上の句、七・七が下の句。

百人一首… 百人の歌を一首ずつ集めたもの。かるたにもなっている。

上の句と下の句の切れ目に／を書き、歌に合う意味をア・イ・ウからえらびましょう。

① あま はら み かすが みかさ やま い つき
天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

ア 遠い国で月を見て、ふるさとの月を思う。

あべのなかまろ
阿倍仲麻呂

イ みかさやま ちか つき み
三笠山にのぼって、近くで月を見ている。

こたえ

ウ くも つき み かえ
雲で月が見えず、ふるさとに帰りたくなった。

② おくやま もみじ な しか こえ き とき あき かな
奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき

ア やま ひろ あき たの
山でもみじを拾って、秋を楽しんでいる。

さるまるだゆう
猿丸大夫

イ やま しか な こえ き あき
山おくで鹿の鳴く声を聞くと、秋はかなしい。

こたえ

ウ しか やま げんき はし
鹿がもみじの山を元気に走りまわっている。

③ これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関

ア せきしょ とお
関所がしまって、だれも通れないようす。

せみまる
蟬丸

イ し ひと はな せきしょ
知らない人とは話さない関所のきまり。

こたえ

ウ ひと い き であ わか せきしょ
人が行き来し、出会っては別れる関所。

④ おらさめ つゆ まき は きり あき ゆうぐ
村雨の露もまだひぬ榎の葉に霧たちのぼる秋の夕暮れ

ア あめ きり た あき ゆうがた
にわか雨のあと、霧が立ちのぼる秋の夕方。

じゃくれん
寂蓮

イ あさ あめ あき いちにち
朝から雨がふりつづく秋の一日。

こたえ

ウ きり ゆうひ み あき ゆうがた
霧がはれて、夕日が見える秋の夕方。

